

桂川・相模川流域協議会会報誌

あじえんだ

2015.11
第35号

桂川源流地域協議会が発足

上下流交流事業

第7回 流域ウォーキング(上野原市)

流域紀行(厚木市 七沢)

きれいな水は上流から ~水再生を天職として61年~

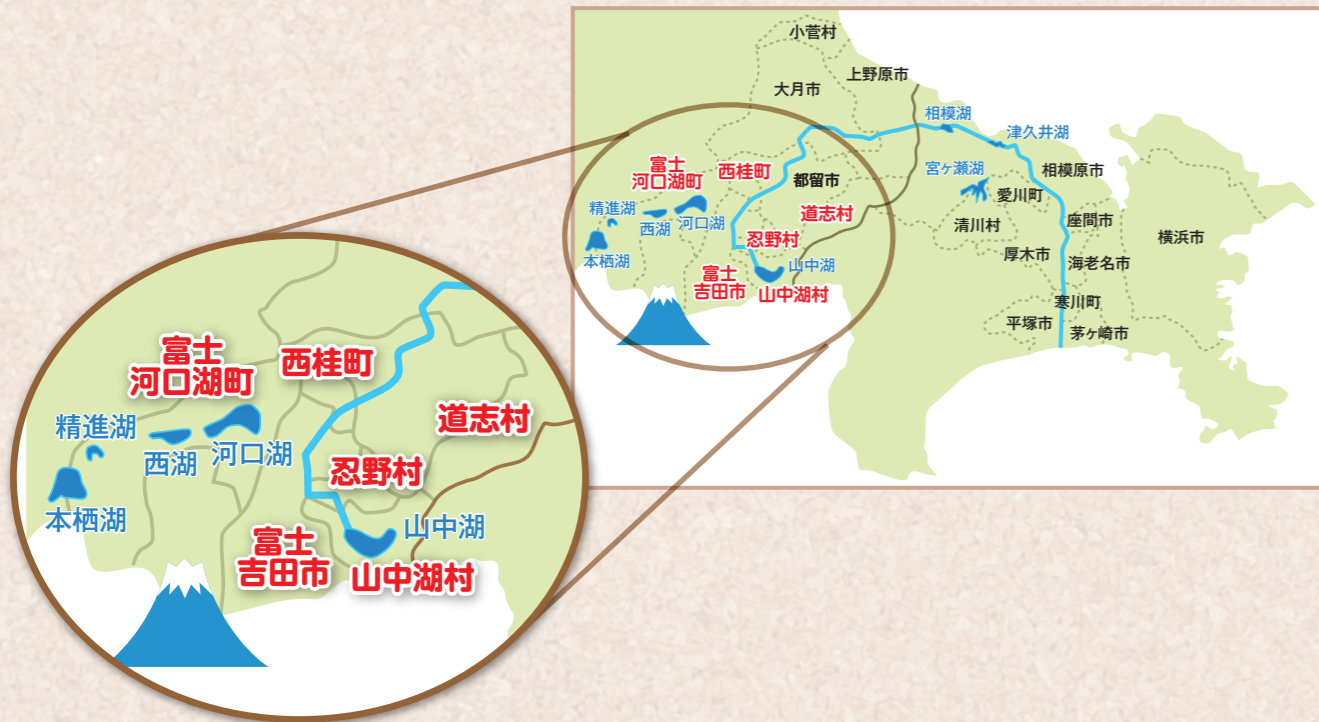
富士山麓から相模湾へ 113km水の旅

日時：2015年6月28日(日)
場所：富士山科学研究所(山梨県富士吉田市)
主催：桂川源流地域協議会・桂川東部地域協議会

報告者 桂川源流地域協議会 会長 樋口重喜

今回のシンポジウムは、2015年4月に桂川源流地域協議会が発足したことを記念して開催しました。桂川源流地域協議会は、2013年に世界遺産登録直後の「富士山」の麓の山中湖村で開催された「流域シンポジウム」が発端となり、源流地域内で協議会を発足させようという機運が生まれ、地域内6市町村、事業者(主に漁業協会)及び環境保護活動を行っている市民団体等で発足したもので、これにより、富士山麓(源流)から相模湾まで、各流域の特色に合った地域協議会が一つにつながりました。

まず、開会にあたり桂川源流地域協議会 会長 樋口重喜が、設立の主旨や経緯等について触れながら挨拶を行い、その後、国会議員、県会議員また地元市町村の代表として山中湖村長等の来賓から祝辞をいただき、また当日出席できなかった国会議員、県会議員、各流域市町村長からのメッセージをいただきました。



(第一部) 基調講演

基調講演は、静岡県補佐官で国際日本文化研究センター名誉教授である安田喜憲先生から「流域 森里海の循環文明とは」と題し、講演が行われました。

安田先生は、上流の住民が下流の住民にもものが言えるようになってきた。それは、生命と水の循環系である富士山が世界遺産になったことである。

我々は、駿河湾の海底から富士山の山頂までは約6000mの落差、地球規模でいうと「絶壁」に住んでいる。その中で、生命の水の循環系がなければ生きていけないということを知っており、守ってきた。それは、私たちの祖先がそのことを直感的に感じとり、その潜在意識は連綿として受け継がれている。



安田喜憲先生

今後も、生命の水の循環を持ち続けるためには、人と自然に対して礼節を守り、卑しい人間にならない、嘘をつかない、利他の心を持つ、以上のことを守っていくことである。

その上で日本人が大切にしてきた人を信じ、自然を信じ、未来を信じること。さらに、過去に感謝し未来に責任を持って生きることです。今までは動物文明のきらびやかさに圧倒されてきたが、これからは動物文明(畑作牧畜文明)から植物文明(稲作漁撈文明)のライフスタイルへと変え、森里海の循環文明を復活させることが、我々の使命である。

(第2部) ゲストスピーチ&パネルディスカッション



中井徳太郎審議官

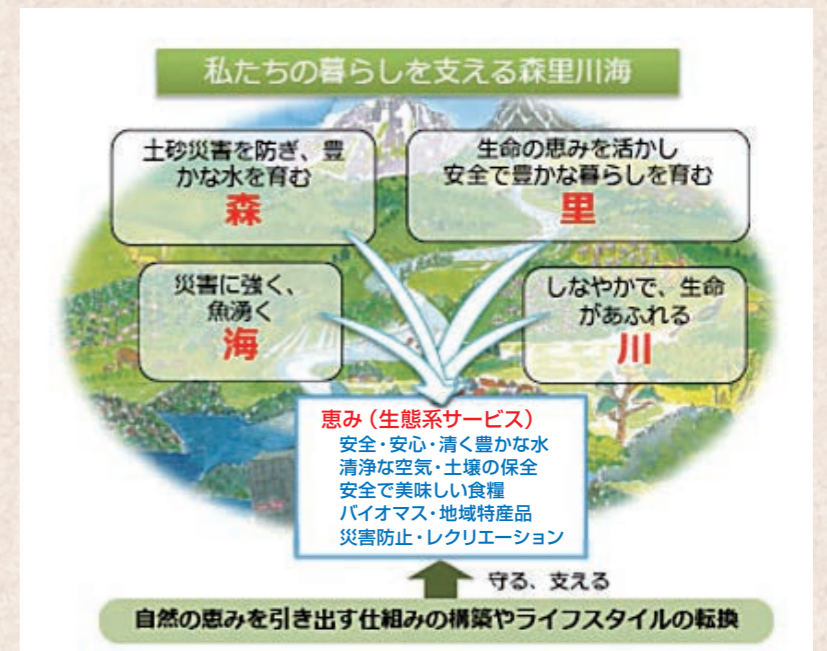
最初にゲストとしてお招きした環境省大臣官房審議官である中井徳太郎氏から、取り組んでいる「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトの現状や課題、今後の目標、それを達成するためのアイデア等について、資料等を使って、お話されました。

概要は、「森里川海の保全・管理に対し地方公共団体や企業、民間団体等の意識の高まり、自発的な取り組みも進みつつある中で、環境省だけでなく、地方公共団体、有識者、先進的な取り組みを実施している方々と対話や議論を行いながら、森里川海の恵みを将来にわたって享受し、安全で豊かな国づくりを行うための基本的な考え方と、対策の方向を取りまとめる」というものでした。

スピーチ終了後、パネルディスカッションに入り、基調講演の安田先生や中井審議官にも加わっていただきました。

まず各パネラーによる課題、取り組みについての話題提供がありました。

- ・瀬子義幸氏(富士山科学研究所特任研究員)からは、富士北麓の地下水質の特徴やパナジウムと健康について
 - ・羽田金祝氏(山中湖漁業組合長)からは、漁協の取り組みと悩み、湖の環境整備、今後の取り組み方針について
 - ・杉本光男氏(山梨県森林組合連合会長)からは、経済面と環境面との矛盾した課題に挑戦している森林経営の現状、現在の取り組み等について
- その後、樋口会長がコーディネーターとなり、ディスカッションが行われ、桂川源流地域の諸問題や今後の方向性を探る貴重な時間を過ごすことができました。



つなげよう、支えよう森里川海プロジェクト概要図

シンポジウム終了後、中井審議官からは、桂川・相模川流域協議会の活動を「先駆的活動」と評価されました。

最後に源流域からのアピールを採択しました。

～水源域からのアピール要旨～

- ①水源域に暮らす私たちは、水環境や森林保全に努め、下流域にきれいで安全な水を届ける重大な責務があります。
- ②下流域に暮らす人々には、水源域の環境保全、経済の活性化、安定した暮らしのために共に支え合う取り組みを呼びかけます。
- ③森・里・海の循環文明を具体的に示す『富士山モデル』の確立を目指し、流域の自治体・住民・事業者等の連携を深め、さらなる水源環境保全に向けた確実な活動を進めたいと思います。

上下流交流事業 楽しかった夏



相模川下流右岸 馬入水辺の楽校
2015年7月18日 10～14時

つながる！ 海、山、川、人の輪

今年も山梨と神奈川の子も達が水辺の楽校で自然と触れ合いました。楽しみにしていた川遊びは増水でできませんでしたが、カエル池の生き物調べやトンボ採り、カヤネズミの巣探しや木登りなど、一日遊びほうけました。今の子もたちは元気がないと言われていますが、みんなエネルギー全開で、おじさん、おばさんたちは正直圧倒されました。何の遊具も必要ない、遊べる環境と大人たちの見守る目があればいいのだとつくづく感じました。山梨の参加者(仲間)からは、「来年はムササビを見においでよ」と再会のお声がけをいただきました。

報告者 峯谷 一好

参加者
馬入水辺の楽校エコアップ隊14名
水辺の楽校関係者12名
桂川・相模川流域協議会
山梨県 大人8名 子供5名
相模川湘南地域協議会幹事4名
講師：三森典彰先生 助手3名

山梨の仲間がバスで到着。
プログラムは原っぱ遊びに
変更。



大雨で増水したため、川でのブカブカ遊び、魚とりは中止。残念！



三森先生の指導でアイスブレイク「人間知恵の輪」を楽しむ。内側を向いた円を作り、両隣以外の人と手をつなぐ。手を離さずにもつれている手をお父さん、お母さんの力を借りて、輪をほどいて行く。上下流域の子が団子状態になり、肌の触れ合う関係となった。



遊ぶ前にしっかりと虫対策。
オイルとハーブで防虫塗り薬づくり。

手を結んだまま、みんなでほどいて
いったら8の字の大きな輪ができた。

2班に分かれて行動。カエル池班は
魚網を手にとって、お魚調べ。
アメリカザリガニの駆除にも一役！



虫とり班は、捕虫網を持って



ウスバキトンボ(左上)
オオシオカラトンボ(右上)
をつかまえた



カナヘビもゲット



カヤネズミの巣もみつけた



カニもたくさんいたよ



木登りも楽しかった。満喫

木陰での楽しい食事



三森講師(左)と来年の話で盛り上がる。

最後に参加者を代表して上流部の河西さんから。

上流部昨年に引き続き、馬入水辺の学校での上下流交流事業、ありがとうございました。

台風の余波で室内での交流になるかなと思っていましたが、臨機応変の対応して頂き、山梨からバスで行ったメンバーは、子供も大人も楽しく充実した思いで帰途につきました。相模川本川は水量が多かったため入れませんでしたが、別メニューのカエル池では、昨年とは違った水辺での体験ができました。参加した子供たちのはじけた笑顔、嬉々とした「河童ちゃん」「お猿さん」が出現しました。アロマオイルを使った虫よけ作りも時宜を得て、女性の参加者たちにも大好評でした。

多様な取り組み、何よりも管理しすぎない管理の在り方・企画内容・受け入れ態勢、学ぶことも多く、今後、上流でのフィールドを使っての交流もできたらいいなと思っています。

桂川・相模川流域ウォーキング

いよいよ
山梨へ!!

第7回 桂川流域上野原市を巡る! (境川橋~上野原) 報告者:中門吉松

第7回目を迎えた今回から県境の境川橋を越えて桂川流域を巡る。相模川と桂川の境は相模湖の湖面にあり川としての面影を見ることができない。そこで、相模ダム建設により水没した勝瀬地区居住者が地区の名称を未来永劫に残すため有志が出資して設立した「勝瀬観光」のモーターボート(小野澤さん・関根さんの案内)で川沿いの県境を越え、桂川橋左岸の上野原市新田に着岸して桂川流域を巡る第一歩を踏み出した。

1 相模湖~上野原

モーターボートで相模湖を上流へ

曇り空で今にも雨が降りそうな中、船頭・小野澤さんが「今日の雨は東から来るので雨の前を上野原に向かいましょう」とスタート。湖底に沈む前の相模川跡を蛇行しながら上流へ向かった。



笑顔の参加者



日連大橋の橋脚に集まったゴミ

2 上野原水辺の風景を巡る

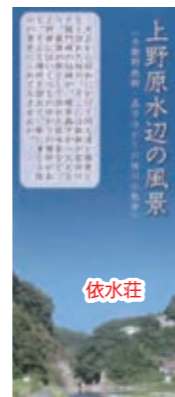
上野原には与謝野晶子が愛した美しい風景がたくさんあります。中でも桂川の水辺の風景は特に美しく、晶子も多くの歌を詠いました。大正10年43歳の時に初めて上野原を訪れてから、昭和16年に寝台自動車で最後の旅を終えるまで、与謝野晶子は幾度となく上野原を訪れました。(市HPより)

モーターボートで桂川橋の近くに着岸、出迎えた酒井さんの案内で与謝野晶子の歌碑と絶景の桂川を眺めながら川沿いに歩いた。松留発電所近くの水辺公園にある歌碑は今年の5月27日、晶子の命日に業績などを偲ぶ「白桜忌」(29日)の前に酒井さんなどの手により除幕されたばかりである。

川が山が織りなす絶景、多くのアオサギやシラサギが川面に群れる光景に自然環境の豊かさを見ることができた。



桂川橋辺りに針金が引かれた渡し場があった



依水荘

3 東京電力八ツ沢発電所、大野調整池見学

駒橋の取水口から上野原市の大野調整池を経て八ツ沢発電所まで約14kmにわたる水路式発電施設です。明治43年から大正3年に建設された我が国最初期の本格的な水力発電施設であり、水路トンネル・水路橋・えん堤など様々な構造物に高い建設技術が施され水路などが重要文化財に指定されている。

【八ツ沢発電所】営業運転開始:明治45年7月(全号機運転開始は大正2年9月)出力:4.2万kw 有効落差:116.29m 最大使用水量:41.74m³/s



八ツ沢発電所

4 龍泉寺で村上住職から上野原の歴史を学ぶ

龍泉寺は和同年間より伝わる天台宗白蓮寺が前身であり、鎌倉幕府に名馬池月を献上(全国で名乗り寺が数ヶ寺あり真偽は50%位と住職)した。

この縁から古先禅師により改宗された時龍泉寺とし、山号は残した。近年本堂建立などの諸工事に於いて旧礎石や多量の板碑等の出土を見た。注目されるものは平安後期の経筒や、須弥壇から発見された鱈口や密教具である。また幻住派の血脈や書画は禅宗史の資料として貴重なものである。(臨濟宗建長寺派寺院名簿より転載) …約30分間、村上住職から話をお聞きした後に本堂の天井絵、板碑、芋大明神の碑などを見学した。



住職のお話し

芋大明神の碑

5 月見が池見学

月見が池は、一級河川桂川の河岸段丘に広がる農地を潤すため、支流の鶴川から1911年(明治44年)延長8,700mの「上野原用水」を整備し1931年(昭和6年)に造成された。2010年(平成22年)3月25日に農林水産省のため池百選に選定された。

参加者の感想

茅ヶ崎市 寺崎 公夫さん

当日は朝から曇り空で、天気心配でしたが、雨には会わず、多少筋肉痛を感じるほどのウォーキングを体験しました。

モーターボートから見る相模湖は、濃い緑色のきれいな水に見えますが、実は周辺から流れ込む生活雑排水による「アオコ」問題があり、流域全体の課題として再確認しました。

又、湖底の浚渫でかき出された砂が茅ヶ崎海岸の流砂復旧に、さらに寒川でも再活用されているとのこと、流域全体のつながりを実感しました。

ボランティア・酒井さんの説明も明快で、自然環境豊かな桂川流域を実感した一日でした。

案内

上野原市観光ボランティア:酒井章雄さん…(酒井章雄さんは上野原での与謝野晶子研究の第一人者です)
桂川・相模川流域協議会幹事・中村道子さん
事前には桂川・相模川流域協議会幹事の宮野貴さんにコースの紹介して頂いた。



流域紀行

厚木市の七沢方面をめぐる

市民部会 諏訪部 晶



今回は厚木市を訪問することになった。事前にリサーチしてみると「厚木は都心から近くにありながら、豊かな自然に恵まれ、気軽にハイキングや温泉に入ったり、また季節に応じた味覚狩りやシロコロ・ホルモンなどの「食」も満載。さらには楽しいイベントなど盛りだくさんのまちです」とあり、市のマスコットキャラクター「あゆコロちゃん」にちなんで相模川の鮎の養殖場やシロコロの製造元、温泉宿等の取材を考えたが、御盆休み直前のためアポが取れず、アポなしの突撃取材になりました。丹沢山塊の東端に当たる里地里山に絞って七沢地区をめぐることにしました。

まず向かったのは神奈川県自然再生計画の推進や自然環境モニタリングと再生技術開発、特定鳥獣（シカ・サル）等の保護管理、調査、傷病鳥獣の救護、国立公園、県立自然公園施設の管理、水源の森林づくり事業、県有林整備など多岐にわたる業務を行っており、水源環境保全税に関する業務を担っているところです。本館は数年前に神奈川県産の木材80%を使って建て替えられ、「自然環境の保全と再生」の拠点になりジオラマや展示スペースも充実し、多くのボランティア団体が活用しています。広々とした敷地内には谷戸地形を生かした雑木林と湿地をめぐる自然観察園、山や街でよく見かける様々な種類の樹木を観察できる樹木観察園、百数十もの品種を集めた椿園、花粉の少ない杉の開発などをする圃場、ケガや病気の動物を治療、保護する小屋や鳥獣保護棟、さまざまな保全の研究棟があります。

ここでアメザリ部会で活動した経験からあえてザリガニ騒動について紹介させてもらいます。自然観察園内の湿地にアサザ、コウホネ、カンガレイ、フトイ、ミクリなどの水草を植栽した池がありました。1990年来園者が「センターの野外施設には、このようなどころにいるべきザリガニがないので今、10匹放してきてあげたよ」と言ってきたことがこの始まりで、職員総出で捕獲したが7匹しか回収できず、3匹残ってしまった。2年後からアメザリの姿が多くなり、10年後には水草が消滅しました。ザリガニが湿地全体に拡散し、その10年後職員だけの駆除から県民参加による駆除を始め、保護したアメザリは治療中の動物の餌として使います。その量は、今年（8月まで）だけで4000頭以上になっています。昨年池のかい堀りに参加しましたが、ザリガニだらけで、水生昆虫はヤゴ数頭と餌にならない数ミリのチビミズムシだけでした。アメザリが入るところも生態系が破壊されてしまうということが実証される場所になってしまいました。それで



写真：(背景 神奈川県自然環境保全センター)



元湯玉川館四代目当主山本淳一さん

も当センターが湿地の再生にかけて駆除に取り組む姿にエールを送ります。

次に七沢の水を使った創業百九十余年の歴史を刻む造り酒屋「黄金井酒造」を訪ねました。翌日からお盆休みに入る準備で蔵の見学はできず、売店でお話を伺いました。地産地消の考えから地元産の米「キヌヒカリ」で作った日本酒、サツマイモで作った焼酎、シカの被害に遭わない作物として七沢で作られるようになったカボスや蔵元の庭でとれるウメ、ユズを使ったリキュール、桃で作った桃ビールなどを作っているとのこと。また、地ビールとしてこだわりの生「さがみビール」もあります。厚木の地酒としては非飲んでみてください。

七沢温泉の宿の一つ「元湯玉川館」の四代目当主山本さんに時間を作って頂きお話を伺いました。七沢温泉は三〇〇年前前に傷ついた蛇が身を癒しているところから発見され、農みや木こりが骨休めやからだ作りに通うほどの「ぐすり湯」として知られていました。玉川館は丹沢湖に沈む古民家や町田や厚木の農家などを移築して建てられた創業百十余年の『現代湯治(いまとうじ)』の宿です。七沢温泉には東洋一の規模、という県立総合リハビリテーションセンターと七沢リハビリテーション病院脳血管センターがあります。脳血管センターでは、七沢温泉が引かれ温泉治療もおこなわれているとのことでした。自然に囲まれた静寂の中、当主の穏やかな語り口に日々の雑念を忘れどどん癒されていきました。このまま温泉につかりビールを飲んで寝ころんでいたいところでしたが、次の訪問地の神奈川県立七沢森林公園に向かいました。

森林公園は横浜スタジアム24個分の広さがある起伏に富んだ地形に雑木林が広がる自然豊かな公園です。手づらで利用できる「バーベキュー場」や民話の語りやわらべ歌、クラフトも体験できる古民家風の「森の民話館」、陶芸・楽焼体験のできる「森のアトリエ」、アスレチック広場や芝生広場もあります。七沢地区では、神奈川県内初の森林セラピー基地として認知され、月一度指導者と歩く体験セラピーも行われています。ところが公園内ではヤマビルが出るため、塩水が置かれ(猿が出没するため、写真のように小屋のようなもの)にしつかりと扉のある囲いに入っている(さらに山道の落ち葉を掃いているという対策が講じられているが、土がむき出しとなり雨で流されて木の根がむき出しになってしまいます。うまくいかないものですね。

今度温泉につかり厚木の地酒を...



県立七沢森林公園内尾根の散歩道



公園内ヤマビル対策の囲い

鮎の漁撈儀礼—川の記憶を訪ねて

小島環禮(愛川町在住 琉球大学名誉教授)

鮎が生活にとって重要であった時代には、鮎の漁撈を祝う信仰もあつたにちがいない。相模川の支流の中津川の中流域、愛川町田代の上河内には水神さまがまつられていた。川の左岸の土手の上に、石の小祠があつた。中津川で漁をする人たちが信仰し、漁をする前にはかならず水神さまにお宝銭をあげ、それから川に入ったという。昭和七年七月の勧請と神札にはある(『愛川町文化財調査報告書』第八集、七七―七八頁)。かつて川の本流がここではなく、田代の天台山の東側を流れていた時代には、また別のところにまつられていたのであろう。

相模川の鮎をめぐる漁撈儀礼については、簡単に展望することはできない。鮎の漁撈には江戸時代から法制との絡みがあり、それを解きほぐす必要がある。近代になっても地元にはいろいろな組織の規制があり、じかに村人の鮎に寄せる心を知ることがむずかしい。それぞれの時代の社会の仕組みと鮎を取る人々の信仰とのかかわりを、なんとか明らかにしたいと願っている。

そこでありがたいのは、厚木市旧厚木町に鎮座する厚木神社の境内に立つ、一つの石碑である。正面の鳥居から入ると、社殿に向かつて左手にある。表に大きく「水神宮」と刻み、その上に割り書きで「厚木／下流」と記し、「昭和二十一年九月五日建立」とある。そこには戦後の漁撈業者の気持ちがあらわれている。裏側には「厚木下流非出資漁業会設立委員名」として、関係者の氏名を挙げる。その住所は、厚木町から海老名町河原口、有馬村、相川村、寒川町、茅ヶ崎町、

神田村、大野町、睦合村に及ぶ。これが厚木町周辺から下流域の漁業撈者の「水神宮」であることがうかがえる。

相模川水系の鮎の解禁日は、六月一日である。この日、厚木観光漁業協同組合では、組合員が小田急線架橋のすぐ下流の左岸に置いてある、廃船になった屋形船に集まって祝いをする。客人もある。ここが宴席で、漁期初日の朝にとれた鮎を、天麩羅に塩焼きにしてみんなで賞味する。とくに「水神さま」をまつったりすることはないが、川に出した船の舳先の船べりに塩を盛り、川に酒を注いで、安全と豊漁を祈る人もあるとも聞いた。これらの行事すべてが、現代の鮎の初漁儀礼である。

北太平洋沿岸の河川には、秋になると大量の鮎類(Oncorhynchus)がさかのぼる。かつて鮎類は川沿いの住民の大切な食料であり、北日本を含めて合衆国北部まで、最初に来た鮎を祝う儀礼があつた。ことに北アメリカの原住民に顕著で、われわれもそれを紹介したフレイザーの『金枝篇』の翻訳(岩波文庫四・九四―九五頁)で読むことができる。

鮎が生活にとって重要であった時代には、鮎の漁撈を祝う信仰もあつたにちがいない。相模川の支流の中津川の中流域、愛川町田代の上河内には水神さまがまつられていた。川の左岸の土手の上に、石の小祠があつた。中津川で漁をする人たちが信仰し、漁をする前にはかならず水神さまにお宝銭をあげ、それから川に入ったという。昭和七年七月の勧請と神札にはある(『愛川町文化財調査報告書』第八集、七七―七八頁)。かつて川の本流がここではなく、田代の天台山の東側を流れていた時代には、また別のところにまつられていたのであろう。

水神宮の提灯



鮎の塩焼き 祝宴の馳走に



神事に参列する組合員たち



神前の供物 中央が鮎



鮎漁をする船 小田急線架橋の下流



ナマズをさばく組合長 馳走の一品



鮎の天麩羅 祝宴の卓上



祝宴の席 廃船利用の屋形船

中流域の堤防や河川敷、ワンドでみられる植物

厚木植物会 長岡 恂



相模川は山中湖を源に、途中、道志川、中津川をはじめとする中小支川と合流しながら、桂川、相模川、馬入川と名前を変え、相模川にそそぐ、山梨県の富士山の北麓、相模湖の上流地域、そして、神奈川県の中西部地域を流域（神奈川県最大の流域）とする延長 113km におよぶ河川です。そのためさまざまな環境に応じ、上流山間部の渓流植物、中流域の河岸段丘や河川敷の植物、そして開発された場所を棲みかとする外来種など、多様な植物種が生息しています。ここでは、主に中流域（愛川、相模原、海老名周辺）の堤防や河川敷、ワンドでみられる植物を紹介します。



テリハノイバラ(バラ科)
茎が立ち上がらずにツル状に長く伸びて伏しているのが特徴。鋭いトゲのついたツルは縦横無人に這いまわるので群生しているところには足を踏み入れることもできない。花時は良い香りが付近に漂い、秋になると花は赤い実となる。



イタチハギ(マメ科)
根の土壌固定力が強く、高温や乾燥にも強いので道路放面の貧栄養な土壌緑化などにも利用されている。しかし、道路法面と関係のない河川敷に近年逸出している。葉裏に腺点があるのが特徴。
環境省の要注意外来生物である。



メリケンガヤツリ(カヤツリグサ科)
熱帯アメリカ原産の帰化植物で、1950年代に日本に入ってきた。1988年ごろ他では稀だったが相模川沿岸では多く観察された。1mほどにもなる大型のカヤツリグサで、花序が球状になるのが特徴。
環境省の要注意外来生物である。

ヒロハノカワラサイコ(バラ科キジムシロ属)
海岸や河原の日当たりのよい芝生などに生える。茎はよく分枝し地面をはい放射状に広がって、長さは30～50cmになる。枝先に、直径1～1.5cmの黄色の花をつけるのが特徴。近縁種にカワラサイコがあるが、相模川では少ない。



ミコシガヤ(カヤツリグサ科スゲ属)
近畿地方以東の河川敷や沼の周囲の草地など、低地の日当たりのよい湿った草地に生える。相模川では河川敷のワンドの緑などに生育し、株立ちになる。長い苞葉の上に乗った小穂の集まりがお神輿を思わせ、名前の由来になっている。



ハリエンジュ(マメ科)
別名ニセアカシア。生育が早く肥料が不要なことで、やせ地の植林や街路樹として往年さかんに利用された。5月ごろ樹全体を覆う蝶型の花は甘い良い香りがし、花から優良な蜂蜜が採れる。市の花に指定している自治体もある。
環境省の要注意外来生物であるとともに、国交省の影響・被害(またはその恐れ)の大きい外来植物、優先的に対策を実施すべき外来植物である。

ヘビトンボ

相模原市立博物館 学芸員 守屋 博文

○トンボ? だけどトンボじゃない

ヘビトンボの成虫は、確かにトンボに似ているかもしれませんが、幼虫の姿はトンボのヤゴとは似ても似つかない姿をしています。幼虫は川底の少し大きめの石の下に潜み、歩き回りながら他の水生昆虫などを丸のみにして食料とする水生昆虫です。体長は約6cmと大きく、大きなアゴと腹部側面には糸状の付属器、その腹部側には総状のエラがあり、他の水生昆虫と比べ異質な形状をしています。



ヘビトンボ(幼虫)

成虫は夜灯りに集まることもありますが、大きな体が重いのか、やっと飛んでいるという感じがです。幼虫と違って捕食性ではなく、樹液を吸っています。

○薬にも利用されていた幼虫

ヘビトンボの幼虫は、「孫太郎虫」とも呼ばれ、現在では流通していませんが、古くから子どもの「疳の虫」に効くとされていました。宮城県白石市斎川の孫太郎虫は有名で、地元田村神社内には供養碑も建てられています。江戸時代には、



孫太郎虫

薬売りの行商人によって全国に販売され、山東京伝(戯作者)が『敵討孫太郎虫』という小説を書き、広く知られることとなったとも言われています。

○ヘビトンボ科3種

相模川には、今回ご紹介しているヘビトンボとヤマトクロスジヘビトンボ、タイリククロスジヘビトンボ3種類のヘビトンボの仲間が生息しています。最も見る機会が多いのはヘビトンボで、幼虫は上流から中・下流の流れの石の下で生活しています。これに対しヤマトクロスジヘビトンボは、崖にしみ出した水の中や細流の水際などで見られ、タイリククロスジヘビトンボは比較的大きな河川の水際の石の下などで見られます。

成長した幼虫は初夏の頃陸に上がり、水辺の土の中や朽木の中に穴を掘って空間を作り、その中で蛹になり、10日ほどで羽化し、穴から出てきます。この生態は、幼虫期にカワニナを食べ、蛹になる時には上陸し、土の中に部屋を作り蛹となり、初夏の頃成虫となって飛び出す、ゲンジボタルとよく似ています。

ヘビトンボが生活していくためには、幼虫の食料となる豊富な水生昆虫と、その水生昆虫を育む河川の存在、また蛹になるために必要となる周辺環境の条件などが必要不可欠となります。清流の象徴とされ環境指標としても取り扱われるゲンジボタルですが、ヘビトンボも河川の状態を知るためには、忘れてはいけない一種かもしれません。



ヘビトンボ(成虫)



着物にまつわる話

あらいそECOクラブ

色とりどりの着物の中で一息ついて、女は考えるのである。
 「今の私に、もうこの柄ははで、この次の着物を作る時は裏地は紅でなく白にしないでね」
 またはこう考える
 「こんな柄はまだまだ地味だわ、老けて見えてはソンドもの。いっそ染めかえようか」
 ——高峰秀子・著『瓶の中』「秋」より抜粋

母が存命の頃、町田の呉服店「近江屋」で染めの相談をしていた。
 母が私にくれた生の寿光織を息子の七五三でデビューさせよう、さてどんな色にしよう、色見本帳を手繰り、あれもこれも素敵…と、女将と母と私は額をつきあわせ悩みながらも幸せな時を過ごしたことを覚えている。
 向かいの珈琲店「ロッセ」に日に何度も通う「近江屋」の大将は珈琲を愉しんでいて不在。
 黄味がかかったレモンイエローに決めた。すぐ着られなくなるからと反対する2人の意見を押し切って。
 「今はお似合いになりますけどね」と女将。
 30代の私は今似合うのが第一。女将がきっぱり言う。
 「5年後、5年後には染めかえなさい」「はい」と私。
 大将が向かいの珈琲店より戻り、入れ替わるように店を後にした。



それから5年もとうに過ぎ、^{たとうがみ}畳紙を抱え町田の通りを「近江屋」目指して進み歩く私の隣に、母はもういない。が、あの日母と共有した時間^{はんすう}を何度も反芻して歩いた。

「近江屋」は姿を消していた。

元気だった珈琲好きの大将は亡くなり、残された女将とお嬢さんは都心の呉服店で仕事をなさっていると、周りの店に尋ね聞き、知った。その場で私はがっくりして力を失ってしまった。

最近^{ひいき}はキモノ友と鼠^{ねずみ}肩^{かた}にしている呉服店で、薄ピンクの長襦袢^{ながじゅばん}を濃い臙脂^{えんじ}に染めかえ、^{つじぎ}紬^{つじ}の裏を落ち着いた色に替え、くすんだ肌でもどうにか耐えられるように工夫が続いている。冒頭^{はつもと}の高峰秀子のエッセイのように。

和服は染めかえながら若い頃から年寄りになっても同じものを着られる。汚れが落ちなければ刺繍^{ししゅう}を施し、太^{みはば}ってしまえば、身幅^{みはば}を出せばよい。

断トツのエコグッズである。

ただ、レモンイエローの色無地は「近江屋」以外で染めの注文をする気になれない。そのま^{たとうがみ}ま畳紙^{たたみ}に包まれている。



『きれいな水は上流から』

～水再生を天職として61年～ 市民部会 勝俣藤久

流れも清き桂川、豊かにめぐる山の波、その懐に抱かれて、生まれ育ち、水再生に生きる喜びとして、一般廃棄物の収集運搬を生業としています。

桂川・相模川の源である富士山麓の地下には、富士五湖・忍野八海の25倍の水があるといわれています。その水は時間をかけ、富士五湖から桂川へとつながります。清涼な桂川の流に、家庭などからの生活排水が垂れ流しとなっていることに心を痛めています。



＝水質保全のための行政の取組み＝

1) 浄化槽整備事業補助金事業

河川などの公共用水域の水質保全を目的とし、単独浄化槽から合併浄化槽への入れ替えを支援する事業であり、桂川流域では、生活排水処理施設の整備がほぼ完了している道志村・小菅村を除く全ての市町村で行われています。特に、鳴沢村は全域を浄化槽による生活排水処理を進めています。

※平成25年度の市町村設置型合併処理浄化槽 処理人口455人 設置基数19基

2) 浄化槽の保守・管理への取組

浄化槽は設置後も、良好な状態で機能させるために、浄化槽法定検査の受検、定期点検や清掃の実施をしなければなりません。しかしながら、前述の法定検査について、山梨県の平成25年度の実績は、第7条検査（設置年に行う検査）77.8%（42位）、第11条検査（設置後毎年行う検査）8.5%（44位）であり、全国的にも低迷した状況です。このような状況を改善するため、各市町村、山梨県浄化槽協会等が一丸となり、浄化槽の持ち主と清掃業者や浄化槽協会の三社契約することにより、法定検査の受検や適切な維持管理・清掃が行われるよう取り組んでいます。

＝きれいな水を神奈川へ 道志川と横浜市の関係 ＝

『きれいな水は上流から』語るときには、その代表として道志村と横浜市の関係があります。村の中心を流れる道志川の水は、英国のパーマー技師設計の導水施設により自然流下により、神奈川県人口の大部分を占める横浜市に飲料水として毎秒2トン（毎分120トン）が送られています。

また、横浜市水道局では、水源水質保全のため、道志村が実施する合併処理浄化槽設置工事に対し、費用の一部を助成しています。

私たちの会社は、昭和29年に村内の横浜市水道局の施設のくみ取りの仕事を受け、以来六十余年にわたり村内の浄化槽等の管理を任せられ毎日3トンを上回る量の浄化槽汚泥などを運搬しています。

（参考：横浜市水道局HP <http://www.city.yokohama.lg.jp/suidou/hamakkodoshi/>）

＝結び＝

全国環境整備事業協同組合理事長の玉川福和氏は、アオコの最大原因は生活排水と工場排水であることを強調し行政に対しても現地支援として合併処理浄化槽を1基でも多く設置し「きれいな水を神奈川へ」と支援いただきました。

私は、山梨県浄化槽協会の役員として、また、浄化槽法定検査業務運営員として、公共用水域を保全していくためには、今後は特に浄化槽から合併浄化槽への転換を市町村と協力しながら進める必要があると考えています。

表1 生活排水処理施設整備の実施状況（抜粋）

H27.3.31 現在	行政人口	下水道	合併処理浄化槽	その他	クリーン処理率	浄化槽業者数
富士吉田市	50,650	20,494	11,681	0	63.5	3
都留市	31,352	8,833	5,917	0	47.0	4
大月市	26,319	4,641	6,435	0	42.1	4
上野原市	24,976	11,412	4,170	0	62.4	4
道志村	1,818	0	1,453	0	79.9	
西桂町	4,548	2,306	828	0	68.9	1
忍野村	9,247	5,495	597	0	65.9	3
山中湖村	5,858	4,223	947	0	88.3	3
鳴沢村	3,173	0	1,656	0	52.2	
富士河口湖町	26,434	20,009	3883	115	90.8	7
小菅村	728	678	0	50	100.0	
流域全体	185,103	78,091	37,567	165	62.6	
山梨県全体	851,680	548,215	116,076	22,112	80.6	

出典：山梨県HP <https://www.pref.yamanashi.jp/taiki-sui/seikatuhaisuitaisaku.html>

桂川・相模川流域協議会 第21回 流域シンポジウム



基調講演 富士重篤氏
NPO法人 森は海の恋人理事長

2015年12月6日(日)
開場 12:30 開演 13:00
大月市民会館大ホール
(大月市御太刀2-11-22)

参加費
無料

詳細・参加申し込みは、裏面をご覧ください

主催 桂川・相模川流域協議会 共催 大月市 後援 環境省、NHK平野放送局、山梨日日新聞社、山梨放送、テレビ山梨 協力 大月市立大月短期大学、都留文科大学
桂川・相模川流域協議会 <http://katurasagami.net/>

第21回 流域シンポジウムの開催

流域シンポジウム第1回が1996年3月、今回と同じ大月市民会館で行われました。それから約20年が過ぎ、時代も流域環境も変化しました。また、国では、流域は一体の者として考える「つなげよう、支えよう森里川海・プロジェクト」を立ち上げ、動きはじめました。

こうしたことを背景に、今回のシンポジウムでは『森は海の恋人』で有名な富士重篤さんの基調講演、3つの分科会での参加者を交えた意見交換を通じて、桂川・相模川流域のつながりについて、一緒に考えていきたいと思えます。

<http://katurasagami.net/>

入会の案内

あなたのその力が豊かな水環境を創ります。

協議会では、さまざまな活動を通じて、水環境の保全・再生に努めています。

桂川・相模川流域協議会に興味を持った方は、是非入会して下さい。

入会手続きは、下記事務局へ問い合わせて下さい。

編集後記

手元には、2000年3月1日発行の第4号から第34号までの会報誌がある。

表紙や本文の写真も白黒からカラーに変わり、見栄えも徐々に良くなってきている。さらには、読みやすく、デザイン性の優れた紙面を工夫し、より良いものとなるよう努力している。

読者の皆さん、会報誌をより魅力的なものにするためのご意見を事務局にお寄せ下さい。(T.T)

表紙写真：撮影場所 横浜水道局西谷浄水場緩速ろ過池整水室上屋 写真提供 横浜市水道局
本誌に対するご意見・ご感想を下記事務局までお寄せください。

あじえんだ113 No.35(2015.11発行)

発行 桂川・相模川流域協議会
編集 あじえんだ113編集委員会

桂川・相模川流域協議会ホームページアドレス <http://katurasagami.net/>

事務局 山梨県富士・東部林務環境事務所 〒402-0054 都留市田原3丁目3-3 TEL 0554-45-7811 FAX 0554-45-7807
神奈川県環境農政局 水・緑部 水源環境保全課 〒231-8588 横浜市中区日本大通1 TEL 045-210-4358 FAX 045-210-8855



■やまなし森の印刷紙
この印刷紙には、FSC®
森林管理認証を取得した
山梨県有林からの木材が
使用されています。



色覚UD

この印刷物は色覚障害の方に配慮し制作しています。